

◆ 第9回 分娩介助では人力が必要

分娩前に650～700kg程あった体重は、分娩後30日頃までに体力回復や泌乳のため、50～70kg程やせると言われております。産気付いて(陣痛)からどのくらい時間が経過したのかと、次のような変化に注意しましょう！

第一胎胞＝第一破水(サラッとして尿のにおいが強い)の確認…①牛の外陰部に球状の破れそうな膜(胎胞)、②外陰部に布切れのような物の付着(胎膜)、③寝藁には、水をまいたように湿った所がある(破水後)、④分娩室の尿のにおい、⑤陣痛開始から3～6時間以上経過しましたか(失位や異常胎子に注意)？

第二胎胞＝足胞・第二破水(羊水で粘りがありヌルヌルしている)の確認…⑥外陰部に袋に入った胎子の肢が見える(足胞)、⑦血が出ていませんか(子宮捻転の検査)？⑧親牛の目や唇の赤味は十分ですか(子宮破裂や血管の損傷)？⑨陣痛が強かったり、逆に非常に弱く感じる事はありませんか(失位の検査)？⑩後肢で腹を蹴ったり、腹痛の症状はありませんか？

分娩が始まったら、決められた濃度の消毒液、綺麗なぬるめの多量のお湯、せっけん、ゴムまたはビニールシート、タオルなどを準備し、つめは短く切り、手を洗い異常の時の準備をします。難産が予想される時は、尾を体に固定し、肛門や外陰部を水で洗い、決められた濃度の消毒液でできるだけ尻の広い部位を消毒し、特に陰裂は少し開き、ふんやわらを洗い流します。

良く消毒した手を静かに膣に入れ、胎子の頭または肢が触れたら少し静かに様子を観察しましょう。もし、頭や肢が触らない場合は子宮捻転や子宮破裂の事もあり、獣医師の到着を待ちます。肢が膣の中または外陰部に出ている時は左右の足首にロープをかけ、陣痛に合わせて胎子を一進一退させ、号令を掛けながら交互に引っ張ります(1本のロープを2人以上の力で引かないこと)。胎子の腰が外陰部に見えたら一気に引っ張り出し、自然にへその緒が切れるのを待ち、ヨード剤をつけること(図1と図2を参照)。

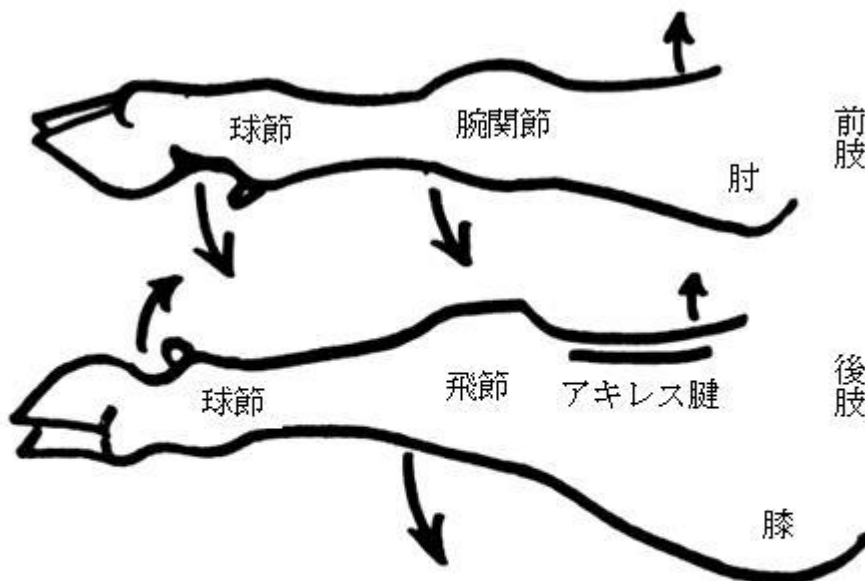


図1 前肢と後肢の違い (矢印は曲がる方向)  
母牛の四肢の動き、蹄底と腕関節、あるいは飛節の関係に注意  
(原：1976)

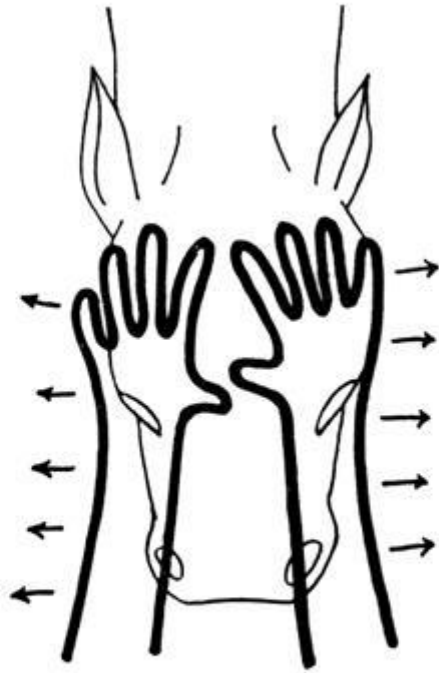


図2 頭の出し方

頭の上に手を置き、両手で額を覆い、手を外側に押し開く (原:1976)

お産後、バケツでみそ汁か砂糖水を感謝を込めてまぜいっパイ！